

明治期の唱歌教育における翻訳唱歌と国民形成

佐藤, 慶治

<https://hdl.handle.net/2324/1831394>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 佐藤慶治

論 文 名 : 明治期の唱歌教育における翻訳唱歌と国民形成

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、明治期の唱歌教育を概観し、「翻訳唱歌」そのものについてを、また、「翻訳唱歌」が当時の唱歌教育の形成、ひいては国民形成において果たした役割を、序章と1～3章、終章にわたって論じるものである。序章では、主に研究の視点と先行研究、その問題について論じた。明治期の唱歌教育を対象とした先行研究は山住正巳以降、多くが存在するが、大別して以下の三つの問題が存在する。①論点が『小学唱歌集』を含めた最初期に集中し、その後どのように発展していったのかという視点が不足している、②唱歌楽曲の歌詞分析が十分に行われていない、③日本国内の事象のみが着目され、西洋との比較考察が十分ではない。問題を解決する上で有効なのが、西洋の楽曲を原曲に持つ「翻訳唱歌」の歌詞内容比較分析である。「翻訳唱歌」の歌詞は、必ずしも正確な翻訳ではないが、欧米の教育思想、文化を日本の社会的状況に合わせた形で伝えているものも多く、原曲歌詞との比較により、当時の日本で必要とされていた教育や、社会的状況を明らかにできる。

第1章では、明治期日本の「国民形成」と「翻訳唱歌」について、その起源を求める形で論じた。第1節においては国民国家論の様々な議論を纏めることから出発し、また「国民形成」の定義を近代の日本に当てはめて考察を行うことで、日本が西洋より輸入した文化を日本化した上で、ナショナリズムとして用いていたという結論を得ている。第2節では、「翻訳唱歌」の源流をドイツ・プロテスタントのコントラファクトゥアと位置付け、比較文化的な手法を用い、宗教改革時代のコントラファクトゥアが19世紀米国の音楽教育界を通じて明治期の日本に受容された様子を描き出した。コントラファクトゥアを改変したものが「翻訳唱歌」であると結論付けている。

第2章では、日本初の官製唱歌集である『小学唱歌集』について、比較を主な方法として複数の視点で分析を行った。第1節では、章を通じて参考とする唐澤富太郎の歌詞分類表について、唱歌同士の比較も交えながら分類基準を考察した。第2節では、その分類表に準じる形でL・W・メーソン編『国楽大系』の歌詞分類表を作成し、それと『小学唱歌集』の歌詞分類の比較を中心として、それぞれの教科書の構成に関する比較分析を行った。第3節では、儒教に基づく部分が大きい「君が代を祝う、忠君愛国的な」唱歌と「教訓的な」唱歌の歌詞について、実際に原曲の歌詞と比較分析を行った。結果として、原曲はキリスト教的内容を含むものが多く、①そのような内容を除去して儒教的な要素を後付けする、もしくは②賛美歌的な内容を天皇を賛える歌へ改変するという、大きく分けて二つの翻案パターンを導き出すことができた。第4節では、「日本の美」と「自然」とのつながりを論じた上で、「自然」を歌った唱歌について分析を行った。「季節」をキーワードとして「翻訳唱歌」の分析を行った結果、多くの歌詞において、季語をはめ込んだ翻案が行われていると判明した。

第3章では、様々な要素が唱歌教育に取り入れられた検定教科書時代の民間製唱歌集に関する考察を、それぞれの楽曲歌詞の分析を中心として行った。第1節では大和田建樹編『明治唱歌』を取

り上げ、その作詞における「高尚の域」について論じている。結論として言えば、それは『小学唱歌集』と異なる唱歌作成方法、すなわち、「四季の定型化を行わない」、「翻訳する場合でも、無理やり教訓や忠君愛国の要素をあてはめない」、「君が代、忠君愛国に関する歌詞の割合を減らす」、「新体詩の思想に基づいた作詞」などが関係するものであった。第2節では、伊澤修二編『小学唱歌』について、ジェンダー観の分析を行った。男子向け、女子向けで巻号を分けているというのがこの教科書最大の特徴であり、それに基づいて「翻訳唱歌」の分析を行うことで、女子向けの「家」、「花鳥風月」、「勉学」、男子向けの「自己犠牲」という明治期のジェンダー要素を見出すことができた。第3節では、田村虎蔵の編纂した二つの唱歌集を分析した。『幼年唱歌』の分析では、ドイツ・ヘルバルト主義の「中心統合」が日本に合わせて改変されたものが「教科統合」であったという構図を導き出している。『少年唱歌』については「翻訳唱歌」を中心とした分析を行うことにより、田村の徳育観、また、その田村が創始した言文一致唱歌や「教科統合」唱歌の別の一面を論じることができた。

終章では、明治期最後の官製唱歌集である『尋常小学唱歌』について論じた。『尋常小学唱歌』には、それ以前の唱歌で見られた「徳育」や「君が代、忠君愛国」、「教科統合」や「言文一致」、「美感」などの要素が内包されており、『尋常小学唱歌』は、明治中期に西洋音楽教育を導入して全くのゼロからスタートした日本人が、日本の伝統を生かかしつつ「翻訳唱歌」を自国文化として同化して行った末の到達点、すなわち明治期唱歌教育の集大成であったと結論付けている。